HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ルターの聖餐論における犠牲の問題
Author(s)	岸本, 羊一
Citation	基督教学, 2, 52-55
Issue Date	1967-06-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46211
Type	article
File Information	2_52-55.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ルターの聖餐論における犠牲の問題

岸本羊一

ルターは Von Ordnung Gottesdienst in der Gemeinde (1523), Formula missae et communionis (1523) および Deutsche Messe (1525) において、彼の礼拝様式の骨子を提示したが、それらの特徴は基本的には西方教会の伝統的なかたちを採りながら、細部とりわけ聖餐の典礼文において「極端に過激」と評される程の思いきった改訂をした点にある。この過激な改訂の目ざすところは、いわゆる聖餐犠牲 (Eucharistic Sacrifice) を示唆するあらゆる要素を排除することにあった。しかし他方、礼拝は、キリストの出来事に関するケリュグマ、とりわけその贖罪のわざの告知が、単なる知的了解のこととしてではなく、具体的に anamnesis を通じて繰返えし現在化されるという仕方で宣べ伝えられることを中心としているのであって、聖餐という anamnesis のわざを通じて想起されるキリストの犠牲を全く排除してしまうことは、キリスト教固有の礼拝の否定を意味する。ルターにもまたこのことが問題であったと思われる。ではルターがおこなった改訂は、どのような意図のもとにこの犠牲の思想を取扱ったのであろうか。またこの思想の過激なまでの排除が、伝統的な礼拝神学を根本的に変えるようなものであったのかどうか。これらについて考察したい。

(一)

ルターのミサ批判のうち、最も一般に知れ亘っているのは、ミサが善行 (opus bonum) であって結局 Werkgerechtigkeit をもくろむものである、という批判であろう。義を得んがためにおこなわれる礼拝、そのうちで献げられ

る献げ物、これらのすべては sacrificium であるといえよう。しかし彼は礼拝を徹頭徹尾 opus Dei として捉えているゆえに、かかる opus bonum et sacrificium を認めえない。この批判は「アウグスブルク信仰告白」の礼拝論に積極的に採り入れられたのであるが、要するに、ここでいわれる犠牲は、典礼史にいわれる固有な意味における犠牲ではなく、ルター神学においてはむしろ贖罪論ないしは義認論の一項として語らるべきものである。メランヒトンは Apologia Confessionis Augustanae (1531) において、このルターのミサ批判の上に礼拝論を展開するが、礼拝論としては極めて不充分なものと思われる。しかもメランヒトンは同書において礼拝を専ら celemonia として捉え、功績を含まない、人間の応答としての讃美と告白をば礼拝の成立根拠とした。彼の発想では、ルターにおいて明確であった「徹底的に opus Dei である礼拝」という理解が大きく後退し、後にあらわれる礼拝の非サクラメント化 (desacramentalization) への道をひらいたことは注目されねばならない。こんにち、ルターの前述の批判は、メランヒトンの解釈によって理解される場合が多く、この点には、より厳密な検討が必要であろう。

(1)

ルターの聖餐犠牲批判は次に、聖餐と「最後の晩餐」(coena novissima) との関係にむけられる。ルターも聖餐を、最後の晩餐の anamnesis として受けとる。後のトレント会議が「キリストは……パンとぶどう酒のかたちのもとに、彼の肉と血とを父なる神に献げられた」(concil. Trid. Sess. 22, Cap. 1) と定義しているように、最後の晩餐においてキリストは自らを犠牲として献げられたゆえに、その anamnesis である聖餐は当然、キリストの犠牲を含む、というのがローマ教会の考え方である。しかしルターは、最後の晩餐における Verba Christi (Einsetzungswort) はキリストの犠牲すなわち神への献げものを示唆せず、かえって自らをわれわれにあたえるという新しい契約を示唆しており、献げ物が同時にかかる賜物ではありえない、と批判する。ここにはルターの聖餐理解が徹底的に受容的であること、裏返していえば徹底してそれを opus Dei として捉えようとする意図が看取される。しかし同時に欠点もある。

Einsetzungswort の釈義において、同時代のエムザー (Hieronymus Emser) の理解に比して狭量である (cf. L. Enders, Luther u. Emser, 1889, 1892, Halle, I, s. 125) との批判は免がれがたい。後者が指摘するようにキリストの犠牲は最後の晩餐との関連においてではなく、むしろキリストの ministrium 全体、ことに十字架との関連において理解すべきで、したがって anamnesis をただ coena novissima にかかわるものと解釈することは十分でない。coena novissima は典礼の様式根拠ではあっても内容根拠そのものではない。

(三)

ルターの第三の批判は anamnesis そのものの理解に関するものである。キリストの犠牲は、Sacrificium propitiatorium であるがこの犠牲の anamnesis である聖餐もまたひとしく Sacrificium propitiatorium であるか否かが問題であった。ビィル (Gabriel Biel) は、ミサにおいてはキリストの死は反復されないことをくりかえし説くが、ルターは、もし聖餐の anamnesis が sacrificium propitiatorium を含むとすればその anamnesis は当然キリストの mortificatio をも含むはずであり、ビィルの云うように mortificatio を含まないものならば聖餐は sacrificium propitiatorum でありえない、という。このような犠牲と mortificatio との関係の理解は、中世後期の民衆の間に広まっていた聖餐に関する極端なリアリズムに合致し、また後にルーゴー (John Cardinal de Lugo) らによって主張されたいわゆる destruction theory にも見られるが、後者が積極的にキリストの mortificatio の反復を主張するのに対して、ルターは、その反復が十字架の犠牲の一回性を否定し、その十全性を否定することを示唆するとしてこれを斥けたのである。キリストの mortificatio がくりかえされるという考えは、前述のルーゴーらの場合を除いて、ローマ教会においても支持されていない。その点を考慮すれば、ルターとローマ教会との間の論争の焦点はむしろ、anamnesis を通じて何が現在化されるかにあったというべきである。ローマ教会の立場は、mortificatio なくしてなお犠牲はありうるとするのであるから、犠牲の本質は mortificatio にあるのではなく、むしろキリストの自発的意志、あるいは愛にあるので

ある。この点においてルターは明瞭に異なっていて、彼は犠牲の本質を「われわれに代ってキリストが忍び給うた罰」において捉える。そして聖餐の anamnesis を通じて伝達されるものは、この犠牲のリアリテイではなく、この犠牲によってキリストが獲得された義、あるいは罪の赦しなのである。このことは決して anamnesis の軽視を意味しない。むしろ真相は逆であって、彼は anamnesis を全く神の独占的な贖罪のわざに基礎づけようとしているのである。

この点から、ルターの説教に対する態度も明らかになる。聖餐は義の賜物を賦与するが、その賜物がどのようにしてあたえられたものであるかが啓示されないかぎり、義の賜物は空しい。この啓示は説教というかたちで伝達されるキリストの ministrium の Gedächtnis (anamnesis) によって現在化されるのである。従ってこの啓示（説教）を欠いた聖餐は真の anamnesis ということはできないとルターはいう。ただ、ルターの論敵であったカエタススがいうように、anamnesis は「これを語れ」といわずにむしろ「これをおこなえ」といわれたキリストの Einsetzungswort に基礎づけられるべきであるとするならば、ルターの anamnesis 論はいま一度根本的に検討しなおす必要があるであろう。

以上われわれは、聖餐犠牲に関するルターの批判を検討してきたのであるが、そこから明らかになったことは、第一に彼が礼拝の神学的根拠を徹底して神の業に置き、従って例えばカール・ホルの云うような die Auflösung des Sakraments (K. Holl, Gesam. Schrift., Bd. I., s. 292) をここに見出すことはできない。第二に、礼拝の内容という点でも、彼は伝統的な anamnesis 論を受けついでいる。ルターの礼拝様式はともかく、その根拠である礼拝神学の点においていうならば、決して新奇なものをうみ出したとは考えることができないのである。

主な参考文献

Martin Luthers Werke. (Weimar. 1883 ff), *Bekenntnisschriften der evangelisch-lutherischen Kirche*, (1952), Gabriel Biel, *Canonis Missae Expositio* (Wiesbaden, 1963), Erwin Iserloh, *Die Eucharistie in der Darstellung des J. Eck.* (Münste in Westfalen, 1950), Francis Clark, S. J., *Eucharistic Sacrifice and the Reformation* (London, 1960), Gustaf Aulén, *Eucharist and Sacrifice* (Philadelphia, 1956).